

## 開会挨拶、概要説明

東京大学医学教育国際協力研究センター 大西弘高

皆様こんにちは。医学教育学会医学教育研究開発委員会委員長の大西弘高です。本日は第二回医学教育研究技法ワークショップにお越しいただき誠にありがとうございます。

私は2000年から2002年までイリノイ大学に留学しておりました。その際診断推論に関する研究にタッチし、教育研究の方法論が通常の生物学的な研究と違うなと感じていました。また疫学的研究とは多くの要因を同時に検証する点で共通しますが、用いる統計手法が少し違っても気付きました。そういうことを医学教育学会ではどの程度考えて議論してきたのかと思って理事会で意見を出したところ、「では委員会を作って議論して下さい」ということになりました。

前期の委員会では、なぜ医学教育研究は難しいのかというような議論をしたりしてきましたが、現場で様々な問題を感じておられ、でも研究をするには少し困難があるような先生方と、理論的な面から教育研究に問題を感じる我々との間でもっとディスカッションが必要だろうと結論づけました。そういうふうなことを考えたときに、やはり皆さんといろんな意見、あるいは知恵を出し合っているようなことを考えていければ一番いいのではないかと考えて、こういうふうなワークショップを企画することになりました。実際のところ皆さんのいろんな意見を聴かせて頂きますと、その医学研究というか臨床研究にしる、基礎医学的な研究にしる、ある程度研究というもののアイデアというのは、むしろ教育研究をやり始めたような僕らみたいな人間よりも、皆さんの方がお持ちなのだろうと思います。ところが教育研究をいざやろうとすると、医学教育の用語とか作法がよく分からないと、上手くいかないのかなあと感じています。医学教育の作法については、医学教育のいろんなワークショップもありますので、そういうふうなところでおいおい身につけて頂かないと仕方がないんだと思うんですけども、そういうもののワークショップにある程度出て、じゃ研究やるとなるとなるとどこがその障壁とかですかね次の何かbreak throughになるんだろう、というところがなかなか皆さん見出せないというか、いい知恵がないというかですねそういうふうな感じの声をよく聞きました。そういうところってどうすればいいのか、僕もまだまだ悩んでいるところではあるんですけども、今年のワークショップでは、とりあえず研究の全く基本的な話をして、皆さんに仮想データをもとにいろんな分析を試みて頂きました。講演は東大の教育学研究科の市川先生に、心理学・教育学等の研究の現況と難しいところということでお話し頂きましたが、この講演に対しての評価は随分高かったので、やはり皆さんそれなりに高い見識を持って教育研究とは何かということについて色々と学び、それを高めていきたいというふうな気持ちが非常に強いんだなという思いを持ちました。

今年は皆さんの“日頃いろいろ感じておられるような疑問点”とか“自分は実はこういうふうなテーマについて調べたかったんだ”という意見を出し合ってもらって、各グループでそういうふうな一つ、各自のテーマに従って研究デザインをしていくことを一日目にやろうと考えています。

それから明日は、福島先生、医学教育学会の『医学教育』という雑誌がありますけれども、そちらの編集委員会代表という形で福島先生にご講演頂くということになっています。『医学教育』という雑誌も基本的には研究した成果を論文に纏めて出すということになるはずなんですけれども、“研

究とは何ぞや”というところに関していろんな議論をなさっていて、結局投稿規程が変わるなどの動きが去年ありました。ただその動きがはたして我々の目指している方向とどのくらい合致しているのかというの少し分からない面もあり、ですね、そのあたりは意識の高い参加者の皆さんからのいろんな意見をむしろ頂きたいというふうなことを編集委員会の方からも聞いています。ですので、そういう一つのいい機会としてですね明日の講演というのを楽しみにして頂ければと思います。それから最後、明日の午前の後半はこちらから仮想データを提供して、それをいろんな形で纏めていくというふうな作業をやらしてもらおうかな、というふうに考えています。そういうことで、今日・明日の2日間にわたってですけれども、皆さんの熱心な参加を宜しくお願いします。